

No. 491【2022年1月28日配信】

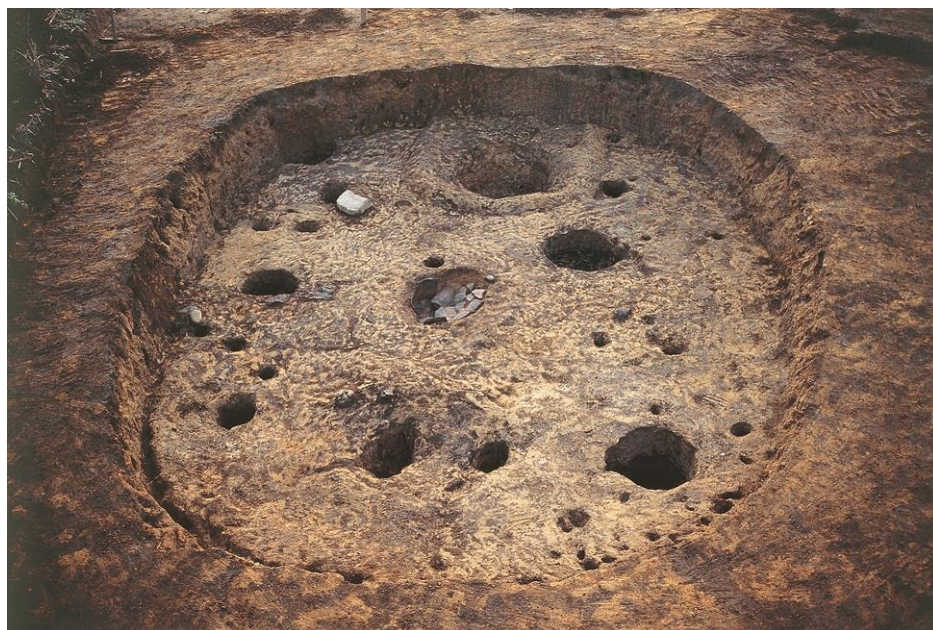
縄文時代の家 (担当: 児玉大成)

こんにちは。文化財課の児玉です。今年もよろしくお願いたします。この時期、雪がうんざりという人も多いと思います。縄文時代にも、当然のごとく雪が降っていたものと考えられますが、世界遺産登録の評価のキーワードにもなっている「定住社会」を基本としていますので、雪が降ったからといって、温暖な地域に移動するわけではありません。

今回は、寒さの厳しい雪国で、縄文人がどのように過ごしてきたのか、縄文時代の家を中心に若干、触れてみたいと思います。

縄文時代の一般的な家は、竪穴住居（近年では用途を限定せず竪穴建物と呼ぶ）で、直径4メートル前後の円形に地面を掘り下げ、屋根を支える柱を立て、萱などの草木で屋根を葺くという構造が考えられています。

また、近年の発掘調査では、岩手県一戸町の御所野遺跡のように、土屋根の住居の存在も確認されています。火災があった住居では、屋根となっている土が赤く焼土化して見つかることから、土屋根かどうかを判断することができます。



三内丸山遺跡の竪穴住居跡

家の中には「炉」がつくられ、ここで火を燃やして調理をしたり、暖をとったり、夜のあかりとして使っていました。縄文時代の初めころは土の床で火を焚いていましたが、しだいに石や土器を使った炉がつくられるようになりました。炉は、家の中央に位置するものが多く、中には壁寄りに設置されるものもあります。

2021年の冬にNHK盛岡放送局の番組企画の一環として御所野遺跡で行われた復元住居での実験では、室内温度がマイナス1度であったのが、炉の使用開始からおおよそ30分後には12度まで上昇。火が保たれるのは2時間程度で、火が消えると室内は氷点下に戻ってしまいました。薪を追加し続けないと室温が下がってしまうため、家族で順番に薪を足すなどの工夫が必要なのかもしれません。一人暮らしには厳しいですね。

また、この実験では1時間あたりに必要な薪の量を約2キログラム、冬の4カ月間、燃やし続けた場合には、約6,000キログラムであると試算され、コナラの木に換算すると約18本であると推定されています。ちなみに薪ストーブを自宅で使用している職場の同僚は、一年あたり軽トラックで約5台分の薪を消費しているとのこと。

東北地方から北陸地方には、直径が20メートルを超える大型の竪穴住居跡が見つかっており、長楕円形（三内丸山遺跡では長さ32メートル×幅8メートル）の形状からロングハウスとも呼ばれています。こうした大型住居の用途は、宴会場的機能を含む公共的行事の場、祭祀・儀礼等を執り行う場といった説がありますが、北日本の豪雪地帯に分布していることから、保存食などをつくる冬期の共同作業小屋としても考えられています。